

少年音楽家(二)

東京女高師教授 岡田美津

一、山の家

小家がたつた一軒遠く、山の半腹の明き地に立つてゐる。粗末な作りだが暖かさうである。家の背後うしろにある切立て岩は、北風を遮りながら日光を浴びて灰白色に峙たつたつてゐる。小家の前の明地は青々としただら／＼坂でそれが、少し先の處へゆくと、急に嶮しい降りになつて、みすばらしい樅と松が生ひ茂つてゐる。小家から左へ細道をとつてゆくと、森林の奥の冷やりとしたところへ出る。右は山が急に開けて、民雄の大すきな景色を見せてゐる。見渡しのひろい谷、銀色の湖水、そこから一線リボンのやうに出てゐる河。その上方には、鼠に、緑に、紫に、山々が重り合つて、わけても高いのが、大空の中まで頭をつき込んでゐる。この小家から他所へ通ずる路らしいものはなく、たゞ森中に消える細道があるばかり。家屋もずつと下の谷に、河に沿うて白くポチ／＼見える他にこのあたりには一軒もない。

小家の中では、廣やかな爐が室の一方を占領してゐる。今六月なので爐には唯灰が白く残つてゐる。もつとも奥の臺所で豚肉豚肉の嗅がして熱火の上でヂュー／＼いふ音がきこえてゐる。室の道具は質素であるが、一寸世間並でない。寝柵が二つ、庵末ながら居心地のよささうな椅子が二三脚、テーブルが一つ、樂譜臺が二つ、函をそへたバイオリンが二つ、それに書籍とバラ／＼の樂譜紙がどこにもかしこにもちらかつてゐる。椅子ぶとんだの、窓掛だの小飾品だのと婦人くさいものがどこにも見えない。さうかといつて銃、生皮なまがは、鹿の角首

など、男子の技や力を物語つてゐるものもない。室の裝飾には、マドンナの立派な版畫と五六葉の寫眞、(それには、こんな山さしかけちがつた、花やかな社會で有名な人の、署名がしてある)と子供の手細工らしい松毬の花綵があるばかり。

臺所に充てた「差掛け小屋」からはバチ／＼いふ音が止んで、通ひ口へ、うつとりした黒眼の子が出て來て。

「父さんどー」呼んで見た。

返事がない。

「御父さん、そこにいらつしやるの」と、こんどはもつと逼るやうに呼んだ。

寢棚の一つから少し音がして、ものをいふけはひがした。男の子は音も立てず一跳びに、隅の寢棚へ、いそいでいつた。此子供は、ほつそりした身體つきの、首のあたりに短い捲毛を垂らした、紅い健康さうな頬をした少年で、女の子のかと思ふ程に、端細の指をしたその纖細な手をのばして。

「父さんいらつしやい僕がね、ペーコンも馬鈴薯もコーヒも皆獨りでこしらへたの。早くよ。さめてしまひます」。

少年の確かりした手に助けられて、父は、そろ／＼と半身を起した。彼の頬も、少年のやうに紅かつたが——健康からの紅味ではない。その眼もや／＼狂ほしかつたが聲だけは低く優しく、懐かしげに。

「民雄か——あ、うちの民雄だな」。

「民雄ですとも、僕でなくてどうするもんか、さ／＼いらつしやい」と少年は笑つて父の手を引張つた。

父はよろ／＼と起き上つて、懸命に氣を張つて直立した。眼の狂ほしかつたのも、頬の上氣してゐたのももう直つてしまつた。そのかはり顔が、急に老人めいて、窶れて見えた。でも可なりしつかりした歩調で室を出て、小さな臺所へ行つた。

ペーコンは、半分黒焦になり、半分は透き通つて硬い寒天のやうだつた。薯は水ばいし、コーヒは微温でどろ／＼してゐた。ミルクまでが酸味があつた。

で民雄は困つたやうにちよつと笑つて。

「父さんのなさるやうにうまく出来なかつたんです」と申譯らしくいつて。

「御料理の合奏では、僕は調子外ればかりやつたんですね。かまどが、ところ／＼大變に熱かつたんでせう、ベーコンがところ／＼焦げちまつて。いもは水氣がなくなさ／＼になつてしまつて。でも、それはかまはなかつたの、僕水をあとから入れたから。牛乳をね、つひ日光に出しはなし／＼置いたから變な味ですね、だけどこの次には、僕うまくしますよどれみんな」。

父は、含笑としたが、悲しさうに首を振つた。

「この次といふ事はないんだよ」。

「何故？如何してなの？もう僕にやらせないんですか、え、父さん」といふ民雄の聲は、眞に悲痛の聲であつた。

父は躊躇した。奥から言葉が突出さうなので、彼は唇を開いて息を吸込んだ。そして、やつぱり何も言はずに急に唇を閉ぢてしまつた。やがて、彼は無造作に次のやうにいつた。

「なあ、折角の御前の料理を、かうしてゐてはすまない。さ、そのベーコンを少し貰はう、父さんは食氣が出て來たやうだ」。

折角出て來たきまぐれの「食氣」も永居はしなかつたと見えて父は一向食べなかつた。そして民雄までがあまり食べないので澁面をしてゐた。彼は民雄があと片付をしてゐる間黙して居た。そして民雄と連立つて戸外へ出て、西向きに腰掛の置いてある邊まで歩いて行つた時もまだ、だまつてゐた。

民雄は、餘程、天氣でもわるい日でなければすつと下の谷にある銀の湖に別れを告げないで床に就いた事がないのである。

「父さん、今夜は金色——夕日ですつかり金色ですな——」

あゝ——綺麗だ」と民雄は自分の大切な湖に目を落して嬉しさうにいつた。

如何にも喜悅^{よろこび}しさの迸つた聲なので、それをきいた父は打たれでもしたやうに畏縮^{ひる}んだ。

「父さん、僕は弾^ひくんんだ。どうしても弾^ひくんんだ」といひ、民雄は家へ跳り入つて頤^{あご}にバイオリンを押しあて、戻つて來た。

父は民雄を眺めて聽き入つた。眺めるにつれ、聽き入るにつれ、父の顔には誇と恐怖、希望と落膽喜びと悲みとが互に勝を制しやうと闘つてゐた。

入日の前に立つて民雄がバイオリンを弾くのは珍らしい事ではなかつた。心を動かす事があれば彼は常にバイオリンに訴へた。わななく絃を藉りて、舌でいへない情^{なまひ}を表はすのであつた。

谷の彼方の山々の鼠や緑は、今は一つ紫になつてしまつた。見上げる空は、一面金と紅の熔けた海であつて、その上に薄桃色の雲が小舟のやうに浮いてゐる。見下す谷は、島も林も暗緑でその中に、湖と河が金とうすもゝ色にうき出てゐて、さながら神仙の世界かと思はれた。

この景色がそのまゝ民雄の曲となり、この美しさが民雄の、空を仰いだ喜びに溢れた顔に現はれてゐた。桃色が薄れて鼠になり、バイオリンの餘韻が消えて沈黙に歸した時、父は口を開いた。強ひて平氣を装はうとしたその聲は、ほとんど冷酷にひびいた。

「民雄、どうく時節が來たぞ。之を止さねばならなくなつた」。

民権は不思議さうに父を見た。顔はまだほんのりと冴えて。

「何を止めるの」。

「之を——こんな事をみんな」。

「だつて父さんどういふわけなの？ こゝは家でせう？」。

父は大儀さうに點頭した。

「さうだ、今までは家だつた。けれどもな、御前だつて始終かうしてこゝに居られるとは思はなかつたらう」。

民雄は小聲に笑つて、また遠い空へ目を放つてうつとりと、

「居られないわけはないでせう。こゝよりもいゝ地とこなんかありやしない、僕はこゝが好き」。

父は苦しい息をして身を動かした。腹部の痛が烈しくて身體の位置をどうかへても樂になれなかつた。彼は病氣なのであつた。彼はそれを承知してゐた。同時に、彼は民雄が疾病や苦痛や死の意味を知らないで、ただ言語ことばとして軽く何氣なく見すごして來たのを承知してゐる。彼は自分の教育法——の一部が誤つて居りはしなかつたかと始めて考へた。

六年の間、彼は民雄を自分一人で護り育てゝ來た。六年の間、子供は、彼の與へる食を喰み、衣類を著、書物を學んだのである。六年の間、彼は我子の爲に考へ計劃し呼吸し動作も生きて來たのである。たゞ時折森を抜けて、山腹の町へ、衣食の料を調へに行くのが氣晴らしであつた。之は皆彼が態まゝと計らつた事なので、彼は善と美のみが民雄の幼な心に入るやうにと考へたのである。悪、不幸、死は民雄の心には意味がないやうにといふ譯ではなく、唯明白はつきりと解つてくれないやうにとの積りであつた。善と美とが心に一杯漲つて、その他のものゝ入る餘地がないやうにと願つたのである。そして今日まで彼は成功して來たのである。實に不思議なほど成功したのであるがしかし現在自分が病氣に罹り、もしやと先が案じられて見ると自分の仕組が賢明ではなかつたかと始めて疑はれ出したのである。

彼は民雄の恍惚とした顔を眺めながら。此の子が林の中で始めて死んだ栗鼠を見た時の不思議がりやうを思ひ出した。子供は、その時六歳だつた。

「父さん！ この栗鼠寝てゐますよ。ちつとも目を覺さない」と云つてそれから撫でゝみて「あれ、冷たい！——大變冷たくなつてゐる」。

その時父は急いで子供を連れて、その場を去つて、その間を曖昧ごまかしてしまつたのだが、子供は平氣であつた。翌日民雄はその話を持出した。目を大きく開いて、心配さうな風に。

「父さんどんなになるの、死ぬつていふのは」。

「何を言つてゐるんだ」。

「牛乳配りの小僧が——今朝あの栗鼠を持つてゐたの。眠てゐるンぢやないッて。死んだンだつていひましたよ。」

「それはな、栗鼠が——よいか——毛の下に入つて居るほんこの栗鼠が他所へいつてしまつたンだ。」

「どこへ？」

「遠いところへ。」

「また歸つて来るの？」

「いえ。」

「栗鼠は行きたがつたンですか。」

「まあさうだらうな。」

「それでも毛衣を置いていつたンですね。——いらぬからなの？」

「ウン。いるなら持つてゆくさ。」

民雄は之を聞いて黙つて居た。それから五六日、妙に黙りこんで居る。ある朝、父に連れられて林にいつてゐた時、彼は嬉しさうに大聲を擧げた。氷が張り詰めてゐた小河の傍に、丁度彼は立つて居て、小さな黒い孔から水が忽忙しなく流れ出すのを眺めて居たのだが。

「父さん、父さん、僕解つた。あの死ぬッていふ事が。」

「どうして。」

「小河の水みたやうなのね。水は遠い所へいつてそして歸つて來ない。冷たい氷の上衣を置いて行きます。あの栗鼠みたやうに。上衣がいらぬンだ。なしで行かれるンだ。ね、父さん。アラ、唱つてゐる、流れながら唱つてゐる。行きたいンですね。」

「そうだな。」

と言つて父は、民雄が、自分でその不可思議にしかも満足の出来る説明をつけたので安心したのである。

その後民雄は書物の中で「死」といふ事にまた出遇つたこんどは人間の死であつた。彼は吃驚りした眼をして父を視上げた。

「人が、父さんや僕のやうなほんどの人が、死ぬの？ 遠いところへ行くのですか？」

「あゝ時が來るとな。立派な良い王様が治めていらつしやるとかいふ遠い國へ行くんだ。父はそう言ひながら慄へて結果如何にと待つて居た。併し、民雄は嬉しさうに微笑して。

「小河のやうに唱ひながら行くンですね。僕小河の歌を聴きましたもの」。

それでその問題は終つてしまつた。民雄はいま十歳になつてゐるが、まだ彼には死は恐ろしいものと響かないのである。この點を父はうれいとも思ひ、この點故に恐れを抱いた。

「民雄。父さんが今言ふ事を御さう」

少年は長い息を一つして父に對つて。

「ハイ」といつた。

「こゝを出てゆくのだよ。世の中では、男も女も子供も御前の來るのを待つてゐる。御前は美しい仕事をしなければならぬのだ。山の中では人の仕事が出来ないから」。

「何故なの。僕こゝが好き。僕、始からこゝにゐるンですもの」。

「始からではない。六年ゐたんだ。こゝへ連れて來た時には御前は、四歳だつた。覺えてゐないだらうな」。民雄は首を振つた。空に注げてゐた彼の眼はまた恍惚となつて。

「僕はあのあすこの雲の船に乗つてゆけるなら——行つてもよいけれど」。

と小聲でいつた。

父は歎息して首を振つた。

「雲の船では行かれない。歩いて行かなくなつては——途中までは——もうぢきに行かなくてはならない——ぢきにだ」。とせか／＼言ひ足した。「御前を連れ戻さなくては——待つてゐる人のところへ。俺にもしもの

事が……」

よろ／＼と彼は立つて、そして眞直まっすぐに歩かうとしたが、足が慄へて顛顛このかみのあたりがピン／＼動いた。彼は弱つてゐる自分に驚いた。恐れおそれの爲に氣が荒々しくなつたか傍の民雄に對つて。

「行かなければならない——明日だ」。

と鋭く言ひ放つた。

「ほんど？父さん」。

「さうだ。さ御出で」。

父は盲滅法に躓き歩いて、どうにかかうにか家の入口まで來た。あとで民雄はまだちつと眺め盡してゐたが、やがて飛び上るやうに立つて、父のあとを追かけた。

○東京女高師保育實習科卒業式

本年は修業年限が一ヶ年になりましたので同科の卒業式は去る三月二十七日午前九時三十分より東京女子高等師範學校大講堂に

於て本校及附屬高等女學校と共に盛大に行はれました。本年度卒業者は十六名。

三月二十五日には保育實習科生一同は長くも宮中拜觀の光榮を擔ひました。